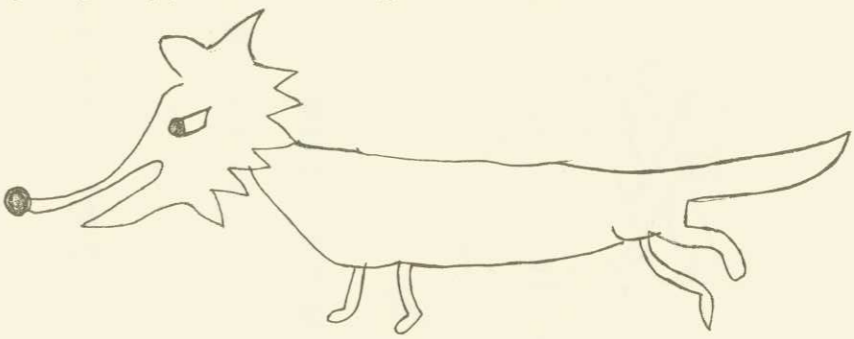


②7 オオカミを生けどりごころ

江戸時代の中頃から寺中と小坂（河和田町）と別司は小浜藩の領地になった。小浜藩の領地は越前には十ヶ村あって、塚原（越前市）に十ヶ村をまとめる大庄屋さまがいた。毎年貢米はここまで運んだ。寺中には、伝治と桶屋という力持ちで鴨居に届くほどの二人の大男がいて、いつも馬の背に荷物をのせて運ぶ仕事をしていた。

十一月のはじめ、庄屋さまから寺中の年貢米を運ぶようにたのまれて、早立ちした二人が別司まで来ると、馬が急に動かんようになった。ほんのり残っている月あかりをすかしてみると、馬の腹にオオカミがかみついていた。伝治は、両手にパツパツとつばをかけると、オオカミにくみつぎ、耳をつかんで、「早う石を持って来い。」とどなった。桶屋はあたりにいかい石がなかったんで、石がきの石をはずして伝治に渡した。伝治はその石で、オオカミの歯をへし折り、生けど



りにして塚原に米と一緒に納めた。

大庄屋の前左衛門さまは、二人の勇気をほめて、「ごほうびを下さったそうな。

②8 テングと友だちに

わかい君らは、テングなんて本当はいないと思うてるやろ。でも、いるんや。どんな姿かっこうをしてるかって。それはだれも見ることがない。

テングには神通力があって、光のように早く走り、空を飛べる。そして、せまいすき間から出入りができ、姿は見せんや。

今から百五十年ぐらい前、寺中の五葉の松の木のある家にテングが遊びに来て、そのお父さんと仲良うなった。げんかんの戸が開かんのに、「お父さんは、「やあびつぎ。いぢり入らびつぎ。と、座敷へ案内するんや。」